

「自分、自分・・・」、恩師の箴言

去る 10 月 9 日、小生の仏教の恩師、蜂屋教正（のりまさ）先生がお亡くなりになりました。明治にお生まれになり、満 101 歳の大往生でした。小生が大学生時代に父の急逝後、あるお婆さんのお導きで、大阪の浄土真宗のお寺、光照寺を訪ねたのが初めてでありました。20代の若い血気盛んなときになぜかしら、先生の営まれる勤行、ご法話にしみじみとした落ち着き、ほんものの雰囲気を感じていたのでしょうか、そのご法話の内容はなかなか理解できなかったのですが、爾来不思議と、先生のご法話を聞きたいという気持ちが起こりまして、その後 20 年以上おそらく 1 回も欠かさず聞き続け打ち込んで参りました。

当時、父の死後、自分としては行こうとは思っていなかった銀行に勤めることになり、自分の思い、生き様、進路の問題、母との葛藤等で悩みを抱えておりました私は、自分でどう考えていいのなかなか解決がつかず、悶々とした日々を過ごしておりましたが、その胸の内を先生に個人的に相談したいと思い申しあげましたところ、先生は快諾されました。

50 歳も年上の人生の大先輩である先生は、毎回私のような若輩の頼りないものを丁寧にお寺の座敷にお通しくださり、自らお茶を立てて下さって、そのうちに私がぼつりぼつりと、そのときの胸の内を話し出すのです。そのときの先生は、じーっと耳を澄まされて、「ふんふん、あーそうですか、ふんふん、あーそうですか・・・」というふうに、ずーっとうなずきつつ、私の話を最後まで腰を折らずにいつも聞いて下さいました。私の話を聞き終わられまして、一息入れられて、「こう考えられたら如何でしょうか」というようにアドバイスを頂くこともありましたが、何しろ私の胸の内をじーっと聞くことに徹していらっしやいました。私は、その御態度に何か知らんとても打たれたのであります。50 歳も年下の私に対して、上から目線でおっしゃることは一度もなく、いつもいつも同じ人間として悩めるもの、道を求めるものとして接していらっしやったのだと思います。終生、私に対して「名倉君」と君付けしないで、いつも「名倉さん」と呼んでいらっしやったことでも現れていました。

後にカウンセリングを学ぼうといたしましたときに、先生はとても喜んでくださり、「そもそも仏教はカウンセリングそのものですからねー。お釈迦様は人類史上最高のカウンセラーであったかもしれません」というようなことをおっ

しゃいました。私自身、何しろ人に寄り添い、そのお心の内側をひたすらお聞きするというその人生態度を、身を以って教えていただきました。

また、先生が長年、岡田虎二郎先生が確立されました静坐法をなさっていることにも影響され、私自身がそのうちに静坐に信が芽生え、毎日坐る習慣がついたことをとても喜んでくださり、「静坐というものは、法を聞く態度・姿勢を作ってくれるものだと思います。」と話して頂きました事が忘れられません。

そのように温容に満ちた先生でいらっしゃいましたが、こと仏道を歩むその心根に関してはとても厳しいものがございました。仏法に関して何も知らなかった私が、聞法を重ねるにつれ、次第に少しずつ少しずつ教えが沁み込んで参ったのでしょうか、段々と喜びが出てまいり、仏教なかんずく親鸞聖人の御教えの深さ、素晴らしさを他人にお伝えしたい、伝道したいというような気持ちになり、それを申し上げました。するとじっと聞いておられました先生は、「名倉さんはもう自分は大丈夫ですか?」「名倉さん、自分、自分。自分が本物にならないと、決して法は伝わりません。」「伝道・教化は言うまでもなく大事なことでありますけれども、何よりも自分ですよー。自分はどれほどのものかと、親鸞聖人という方ほど、自己を厳しく見つめて行かれた方はいないと思います。」と、親鸞聖人のお言葉『よく自ら己(おのれ)が能を思量せよ』を引かれ、自他の幸福を真に願うのであれば、このわが身を徹底的に厳しく掘り下げ見つめていく「自己内観」しかないのだとお諭し下さいました。

そこにおきまして、すぐに自惚れ、教化者の立場になっていく危険性を常に持っている私に対して、「自分、自分」と先生は、いつも親鸞聖人の人生態度から学ばれた一道をお示し続けておられます。何しろ、油断ならず怖いのは、他でもないこの自分であります。「自己内観」の道は、自分でどうしようもない弱い自己の発見であり、常に自己の思いに執着し、自分で自分を良き方向に制御し尽くすことができない、自己中心的な凡人の発見であります。煩惱から離れられず、罪・障りが深く重く、決して救われようのないのがこの私だと真にうなずいて行く道であります。この「決して救われようのない極重悪人の私だ」と頭が下がった人間にして初めて、阿弥陀と呼ばれる計り知れない無量の不可思議な慈悲のおはたらきに真に出会うことができ、そのままで安心を得て生きていけるようになるのであります。それがお念仏「南無阿弥陀仏」のお心であると頂いております。

恩師、蜂屋教正先生のご教示のおもむき、耳の底にとどまるところを少し、生誕 102 歳の本日 11 月 17 日を記念して書かせていただきました。合掌  
(ご質問・ご意見・ご感想をどうぞ。 [mikinakura87@gmail.com](mailto:mikinakura87@gmail.com) まで。)